東京ドキュメンタリー映画祭 2018

Tokyo Documentary Film Festival

映画、テレビ、ネット動画の枠をこえた、ドキュメンタリーの祭典！

日本とアジアから集まった長編10本、短編24本のコンペ作品がグランプリを競います。

審査員による選考の他、みんなで選ぶ「観客賞」も。あなたも「イチ推し」を選んで、入賞をプッシュ！

ニコニコドキュメンタリーから賞金が出る「あなたが審査員！予告編大賞」も同時開催。視聴者がコンペ部門の予告編から受賞作を決めます。

http://live2.nicovideo.jp/watch/lv314961956

12月1日（土）-14日（金）

新宿 K's cinema

長編コンペティション審査員
原一男（審査員長・映画監督）
中野理恵（映画配給）
伏屋博雄（映画プロデューサー）

短編コンペティション審査員
筒井武文（映画監督）
金子遊（批評家・映像作家）

公式 HP：tdff-neoneo.com
twitter：@TDFF_neoneo　Instagram：tdff.neoneo
Facebook：https://www.facebook.com/tdff.neoneo/

主催：neoneo 編集室
お問い合わせメール：tdff.neoneo@gmail.com

協賛：ニコニコドキュメンタリー

助成：公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京

上映スケジュール

12月1日（土） 10:00 - 招待① 19:00 - 長編①
12月2日（日） 9:45 - 長編② 19:00 - 短編①
12月3日（月） 10:00 - 長編③ 19:00 - 特別①
12月4日（火） 10:00 - 特別② 19:00 - 短編②
12月5日（水） 10:00 - 長編④ 19:00 - 短編③
12月6日（木） 10:00 - 短編④ 19:00 - 長編⑤
12月7日（金） 10:00 - 長編⑥ 19:00 - 短編⑤
12月8日（土） 10:00 - 短編⑥ 19:00 - 長編⑦
12月9日（日） 9:45 - 特別③ 19:00 - 短編⑦
12月10日（月） 10:00 - 特別④ 19:00 - 招待②
12月11日（火） 10:00 - 招待③ 19:00 - 短編⑧
12月12日（水） 10:00 - 長編⑧ 19:00 - 短編⑨
12月13日（木） 10:00 - 特別⑤ 19:00 - 長編⑨
12月14日（金） 10:00 - 特別⑥ 19:00 - 長編⑩

上映後**各賞授賞式**

トークイベント

特別①「ドキュ・メメント」
内山直樹、松井至、竹岡寛俊、西村大助

特別③「東京オリンピック」
中垣恒太郎（専修大学教授）

特別④「中国インディペンデント映画の現在」
鳥本まさき（中国映画研究）

特別⑤「ドック・ノマズ」
安岡卓治（日本映画大学教授）、藤岡朝子（山形国際ドキュメンタリー映画祭理事）

特別⑥「没後25年 映画作家・野田眞吉特集」
トークゲスト来場予定（進行 neoneo 編集室 高瀬郁人）

招待①『MINAMATA NOW ！』
原一男（映画監督）

招待②「映画になった男」
金子遊（批評家・映像作家）

招待③「追悼！田村正毅（たむらまさき）」
伏屋博雄（元小川プロ・プロデューサー）

＊コンペ部門の上映では、上映後に監督らによる舞台あいさつがあります。他のプログラムでも、上映後にトークショーがある場合がございます。詳細は公式サイトをご覧ください。　tdff-neoneo.com

＊お問い合わせメール　tdff.neoneo@gmail.com

＊「東京ドキュメンタリー映画祭」では、映画祭を支えて下さるサポーターを、クラウドファンディングで募集しています。10/31 まで実施中です。詳細は Motion Gallery のサイトをご覧下さい。
https://motion-gallery.net/projects/TDFF

【前売】
1回券＝1,300円
3回券＝3,300円（期間中も販売）
【当日】
一　般＝1,500円均一
シニア＝1,000円（いずれも税込）

特別① ドキュ・メメント

12.3(月) 19:00-

上映予定作品：『ドキュメント 2018 総集編』
内山直樹『マッドレスラー』予告編ほか
＊プログラマー 松井至

「生身の人間が一番面白い」というコンセプトを掲げ、品川宿で開催されているドキュメンタリーの祭典「ドキュ・メメント」。取材対象者がライヴ登壇者になって、社会に向けて言葉を投げかける場を作っている。この特別プログラムでは、撮影現場の映像を見せながら、制作メンバーが社会とドキュメンタリーの関係性についてプレゼン。後半は「ドキュメンタリーのレントゲン図」を発明したデザイナーの SOMEONE'S GARDEN（西村大助）を招聘し、作家／作品／撮影対象の「運命」を図解し、ドキュメンタリーとは何かを大解剖する。

特別② 設立二〇周年 ビデオアクト選 強制不妊手術を問う

12.4(火) 10:00-

『忘れてほしゅうない』
制作＝優生思想を問うネットワーク /2004 年 /24 分
『ここにおるんじゃけえ』
監督＝下之坊修子 /2010 年 /97 分
＊プログラマー ビデオアクト

昨今あらためて問題となった「強制不妊手術」、「優生思想」を問いただす2作をあわせて上映。生後1週間で脳性マヒになり、20才の頃、強制不妊手術を受けさせられた佐々木千津子さんは、90年代後半から積極的に強制不妊手術の実態を語ってきた。『忘れてほしゅうない』『ここにおるんじゃけぇ』は後遺症に悩みながらも24時間介護を受け、ネコと共に自立生活をする彼女の日常、その生き方に迫る。20年間、自主制作映像の普及・流通のサポート活動等をとおし、インディペンデント・メディアの状況に変革をもたらしたビデオアクトが今こそ選ぶ注目作！

特別③ 昭和の輝き 東京オリンピック

12.9(日) 9:45-

『オリンピックを運ぶ』
監督＝野田眞吉・松本俊夫 /1964 年 /43 分
『あるマラソンランナーの記録』
監督＝黒木和雄 /1964 年 /63 分
＊プログラマー 高瀬郁人

2年後に控えた東京オリンピック開催記念スポーツ映画特集。昭和の戦後復興の象徴、1964年の東京オリンピックを記録映画を通じて回顧する。『オリンピックを運ぶ』は、高度成長期のダイナミズムを感じさせる大迫力の運輸工程と、寡黙に作業をこなす労働者の姿がコントラストを織りなす。『あるマラソンランナーの記録』は、東京オリンピックを見据え、故障しがちな体にも拘わらず、激しいトレーニングに励む孤独なアスリート・君原健二を追う。PR 映画という枠の中で、若き頃の野田眞吉・松本俊夫・黒木和雄がオリンピックをとう捉えたか、彼らの葛藤の記録でもある。

特別④ 中国インディペンデント映画の現在

12.10(月) 10:00-

『ザ・デイズ3』監督＝魏曉波
2017 年 /90 分 / 中国　日本語字幕あり
＊プログラマー 鳥本まさき

政府による検閲や規制をかいくぐり、中国の埋もれた歴史やナマの庶民の生活に光を当ててきた中国インディペンデント・ドキュメンタリーの世界。今日に至るまでワン・ビンをはじめ、魅力的な多くの映像作家を輩出してきた。今回紹介するウェイ・シャオボー監督の『ザ・デイズ3』は、監督自身とガールフレンドの生活を、7年間にわたり撮影し続けた実験的なシリーズの第三作。ひと組の男女の結婚、妊娠、そして出産…その全てにカメラが回るとき、"日々の記録"は珠玉のドキュメンタリーのワンシーンへと昇華する！

特別⑤ 国境を越える「ドック・ノマズ」短編選

12.13(木) 10:00-

『月と太陽と銃兵』監督＝ヴァハグン・ハチャトリヤン
2017 年 /20 分 / アルメニア・ポルトガル
『バルス』監督＝ロビン・ペトレ /2015 年 /26 分 / ハンガリー
『ウィズ・オール・アワ・カメラス』監督＝ミケル・ペラーザ
2016 年 /26 分 / スペイン・ハンガリー
＊プログラマー 藤岡朝子

リスボン、ブダペスト、ブリュッセルの3大学連携によるドキュメンタリー制作の修士コース「ドック・ノマズ」。全世界から集う若者が、移動しながら二年間を過ごす「ドキュメンタリー」と「遊牧民」を掛けた名称のプログラムから、これまで59カ国の150名以上が巣立った。『ゲンボとタシの夢見るブータン』の共同監督をはじめ、卒業後異国のクラスメート同士が互いの作品のプロデュースや編集を担う合作が次々誕生している。昨年品川宿ドキュメメントのお寺で初上映した2作に新作を加え、国境を越えた出会いと教育で豊かになるドキュメンタリーの今を考える。

特別⑥ 没後二五年 映画作家・野田眞吉特集

12.14(金) 10:00-

「この雪の下に」1956 年 /33 分
「マリン・スノー ― 石油の起源 ―」1960 年 /25 分
「ふたりの長距離ランナーの孤独」1966 年 /9 分
「冬の夜の神々の宴 ― 遠山の霜月祭」1970 年 /37 分
＊プログラマー 高瀬郁人

映画作家・野田眞吉（1916 - 1993）の多岐にわたる業績の一部を概観するプログラム。山形県大井沢を舞台に、農山村に生きる人々の冬の厳しい生活の諸断面を捉えた『この雪の下に』。石油生成の起源をテーマにした自然科学の解説映画が構想されていたが、これを一篇の叙事詩的映画に構成した『マリン・スノー』。『ふたりの長距離ランナーの孤独』は奇跡的に撮影された東京五輪マラソン競技中のハプニング映像を活用した実験的映画。『冬の夜の神々の宴』は長野県下栗部落に伝承されている「霜月まつり」を記録した。

主催：neoneo 編集室　助成：アーツカウンシル東京「TOKYO TOKYO FESTIVAL」　協賛：ニコニコドキュメンタリー
映画祭運営：伏屋博雄　金子遊　佐藤寛朗 若林良 佐藤奈緒子 高瀬郁人 山本麻都香　デザイン：菊井崇史　WEB デザイン：古谷里美

新宿駅東南口階段下 甲州街道沿ドコモショップ左入ル

新宿 K's cinema

03（3352）2471 www.ks-cinema.com
各回入替・整理券制

東京都新宿区新宿3丁目35 － 13
JR 新宿駅 東南口 徒歩3分　東口 徒歩5分

●各回定員入れ替え制●上映開始後のご入場は、お断りさせて頂く場合がございます●満席の場合は入場をお断りさせて頂く場合がございます●作品により画像、音声が必ずしも良好でない場合がございます。あらかじめご了承下さい。

東京ドキュメンタリー映画祭の開催にあたって

いまドキュメンタリー映画のブームといわれており、多い年には100本を上回る作品が全国の劇場で公開されています。テレビの地方局やBSやCSで1、2度オンエアされるだけの優れた番組も多くあり、YouTubeなどのサイトにドキュメンタリー的な動画を発表する若手も少なくありません。本映画祭は、映画・テレビ・ネット動画の垣根をこえて、国内で撮られたドキュメンタリー作品が一堂に会する場を創出します。魅力的な作品に出会い、監督たちと対話し、次の年はひとり一人の市民がつくり手として、この映画祭にもどってきて下さることを期待しております！

金子遊（「東京ドキュメンタリー映画祭」プログラム・ディレクター）

上映作品・プログラム紹介

長編コンペティション作品　招待 作品・プログラム
短編コンペティション作品　特別 作品・プログラム

長編① 破天荒ボクサー
12.1(土) 19:00-

監督＝武田倫和 /2017年 /115分

「大阪帝拳」に所属していたボクサーの山口賢一は、11連勝を果たすもタイトルマッチを組んでもらえなかった。業を煮やしてJBC（日本ボクシングコミッション）に引退届けを提出。闘いの舞台を海外に移し、非公認の団体でスーパーバンタム級暫定王者となる。海外で経験を積むうちに、日本のボクシング界の寒古状態に疑問を抱くようになった山口は、世界タイトルマッチに再挑戦するため、リングの内と外の両方で熾烈な闘いを強いられる…。近年、問題が取り沙汰されるボクシング協会の内側に切りこんだ、社会派のボクシング映画。

長編② 辺野古抄
12.2(日) 9:45-

監督＝八島輝京 /2018年 /132分

米軍基地の移設問題に関するニュースで度々見聞きする「辺野古」という地名。監督は大学を休学して1年間辺野古に住みこみ、住民の生活を丹念に撮影していった。すると、そこには当然ながら、農作業や仕事に従事する人、長寿を祝う民俗行事、米兵と地元民が一緒に祝う祭りなど「辺野古の日常」があった。私たちは無意識のうちに、辺野古＝基地問題という単一の物語を押しつけていたのだ。見逃されがちだった地元住民の生活を丹念に描き、メディアや国民の関心のあり方に疑問符を投げかける、斬新な視点をもったドキュメンタリー。

長編③ OKINAWA 1965
12.3(月) 10:00-

監督＝都鳥伸也 /2017年 /95分

1965年、米軍占領下の沖縄。本土復帰を求める祖国復帰行進のさなか、報道写真家の嬉野京子によって1枚の写真が撮られた。幼い少女が無残にも米軍のトラックに轢殺された、当時の沖縄の縮図といえる写真。本作は沖縄のガンジーこと阿波根昌鴻をはじめ、沖縄の祖国復帰運動や基地問題をさまざまな証言で浮き彫りにする。特にヴェトナム戦争で多くの人を殺したと告白する元海兵隊員が、沖縄で非暴力に目覚めていったエピソードは心に残る。求めるものは、辺野古新基地建設断念とすべての米軍基地の廃止。沖縄の戦後はまだ終わっていない。

長編④ タリナイ
12.5(水) 10:00-

監督＝大川史織 /2018年 /93分

太平洋戦争時、南洋のマーシャル諸島で死んだ日本兵のほとんどが、栄養失調による餓死であった。その状況下で、兵隊だった父親が書き残した日記を、何度も読み返して生きてきた74歳の佐藤勉さん。70年の月日をこえて、死にゆく父が目にしたであろうマーシャルの島々を現地のガイドと訪ね歩く。大砲の残骸や塹壕が点在し、戦跡とともに暮らす島民は、彼をウクレレの陽気なメロディで迎える。日記の引用によって浮かび上がる戦争末期の悲惨さと、それとは対照的なコバルトブルーの海やサンゴの砂浜が彩る、喪失と痛み、癒しと回復の物語。

長編⑤ 双子暦記・私小説
12.6(木) 19:00-

監督＝原將人 /2018年 /110分

『20世紀ノスタルジア』などの映画で知られる、原將人監督による珠玉のセルフ・ドキュメンタリー。大島渚、若松孝二など先輩の映画人が亡くなる中、京都で様々なアルバイトを転々とする原は、思うように映画を撮れない日々にジレンマを覚えている。大分の妻の実家に預けている双子の赤ん坊に会うため、陸路をバイクや車で九州まで通うが、思わぬ運命のアクシデントが待ち受けていた…。iPhoneによる撮影、YouTubeに作品を断片的に発表していくなど映像の現在を更新し続ける、原將人からのドキュメンタリー映画界への挑戦状。

長編⑥ 抱く〈HUG〉
12.7(金) 10:00-

監督＝海南友子 /2016年 /69分

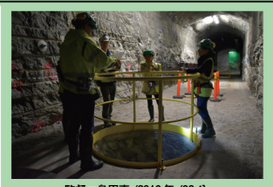
2011年3月に起きた東日本大震災と福島の原発事故。以前から環境をテーマにドキュメンタリーを製作してきた監督は、事故直後に20キロ圏内に入り、大熊町の周辺を取材する。取材を継続している途中に、40歳にして自分自身が初めて妊娠していたことを知る。はたして胎児への放射性物質の影響は大丈夫なのか。放射能への不安のなかで、取材を続けるべきか立ち迷い、やがてカメラは母になる自分へ向けられていく。妊娠と放射能汚染という、原発事故後の日本社会におけるタブーに切りこんだセルフ・ドキュメンタリーの問題作。

長編⑦ 日常対話
12.8(土) 19:00-

監督＝黄惠偵 /2016年 /88分 / 台湾

監督自身に娘が誕生したことをきっかけに、同じ家に住みながらも親子らしい会話のなかった母親と、映画製作の過程を通じて向き合う作品。元夫からのDV、自らのレズビアンというセクシュアリティ、社会からの抑圧…。母親、親族、彼女のかつての恋人様々な知人へのインタビューを通じ、母親の苦悩と共に、監督との溝が浮き彫りとなっていく構成は圧巻。人間の内面や、他者と関係を育むことの恐ろしいまでの複雑さを、セルフドキュメンタリー的な自己言及と、母親に対する鋭い視線を織り交ぜ描写した、侯孝賢プロデュースの家族ドキュメンタリー。

長編⑧ チャルカ 未来を紡ぐ糸車
12.12(水) 10:00-



監督＝島田恵 /2016年 /90分

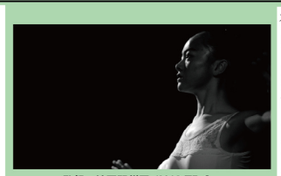
福島の原発事故以降、何十万年も毒性が消えない「核のゴミ」の処分方法を、国は決定できずにいる。高レベルの放射性廃棄物を地層処分する研究施設をもつ、北海道の幌延町。映画は、その近くで酪農を営む久世薫嗣さん一家の生き方を紹介し、もう一つの研究施設がある岐阜県の東濃地域を取材する。そしてカメラは、世界初の地下処分施設を建設中のフィンランドのオンカロと、原子力大国フランスの処分計画地のピュール村を取材。処分地に生きる人々の生活と抵抗する姿を描きながら、人類が直面するエネルギーの課題について問いかける。

長編⑨ うつろいの木
12.13(木) 19:00-

指揮＝岡本和樹 /2013年 /90分

埼玉県川口市で行われた映画創作ワークショップ。一般の市民が公共スペースに集まり、監督や他の参加者とディスカッションを重ねながら、自分たちの手でシナリオを完成させていく。年齢も経験も異なる参加者には、人の数だけ物語への解釈があり、ときには言い争う場面もドキュメンタリー部は記録する。一方、フィクション部はそれぞれ高齢者、中年、若者の三組の男女を中心にした愛と生活をめぐるドラマである。どこまでがフィクションで、どこまでがドキュメントなのか。映画は虚実の皮膜を何層も重ねながら、演じることとは何かを問いつづける。

長編⑩ 断層紀
12.14(金) 19:00-



監督＝波田野州平 /2018/75分

祖父の残した大量の8ミリフィルム。“カメラを持った男”のごとく各地で撮影した映像は、リュミエール兄弟の記録映像のような独特の生々しさがある。祖父の影を追う“私”が撮影した大館の風景、その過程で出会った少女の映像日記。異なった時代と空間を生きる3者の声と視点が次第に交わりを見せていく。本来は私的なシネ・エッセイでありながら、観客に与えられる情報は断片的で、その輪郭が曖昧なまま、新たな詩を紡ぐように映像が束ねられる。自己、他者、実存といったモチーフと共に、映像を撮る行為へ言及していく静かなる意欲作。

短編① 記録なのかフェイクなのか？
12.2(日) 19:00-

『PAKKKKKKKIS（パッキス）』
監督＝相馬あかり /2016年 /47分
『YARASE ～フェイクニュースの見破り方～』
監督＝大川晃弘 /2018年 /40分

ドキュメンタリーとフィクションの境界を大胆に、かつ遊び心満点に揺さぶる問題作2本立て。『PAKKKKKKKIS（パッキス）』はヒップホップ界の伝説と呼べる、盲目のラッパーパッキスの密着ドキュメンタリー。手法と題材が見事にマッチしたジャパニーズ・ヒップホップ映画の最新型である。報道番組の制作過程における「ヤラセ演出」の実態を戯画的に描いた『YARASE ～フェイクニュースの見破り方～』は、善か悪かという問い、およびリアリティを突き抜けた強烈な存在感を放つ豪腕ディレクター・万破の怪演が光る。

短編② 未知の大陸アフリカ
12.4(火) 19:00-

『リアル・ギャングスターズ』
監督＝永井陽右 /2017年 /17分
『マッガビット ～雨を待つ季節～』
監督＝松村圭一 /2016年 /28分
『トホス』監督＝村津蘭 /2017年 /27分

未知の大陸アフリカを舞台にした渾身の3作。ナイロビでも治安の悪いソマリア人難民地区の若者のギャング化を取材した『リアル・ギャングスターズ』。中東への出稼ぎに不安と期待を抱きながら雨季を待ちわびるエチオピアの農村の娘たちを描いた『マッガビット ～雨を待つ季節～』。ベナン共和国の憑依宗教ヴォドゥン信仰で神として村人に愛される知的障がい者ボールや占い、祭事を文化人類学的に記録した『トホス』。今なお簡単に踏み込めない土地に果敢に挑み、アフリカの多様な「今」を取材した作品をぜひ劇場で体験してほしい。

短編③ 家族ドキュメンタリーの臨界点
12.5(水) 19:00-

『Birth- つむぐいのち - おどるいのち（滋）』
監督＝荒井知恵、池田爆発郎、若見ありさ /2018年/26分
『愛のカンヅメ』監督＝森岡怜奈 /2017年 /30分
『影の由来』監督＝波田野州平 /2017年 /27分

「家族」に迫るプログラム。さまざまな出産のあり方に、アニメーション技術を駆使しての多彩な表現で迫った『Birth- つむぐいのち - おどるいのち』。引きこもりの妹と母のあいだにある葛藤を親族ならではの距離感でとらえ、むき出しの感情を引き出すことに成功した『愛のカンヅメ』。戦地における祖父の手紙と、それに応える祖母の声を通して監督が自らのルーツに迫った、端正な映像とナレーションが深い余韻を残す『影の由来』。「家族」に対してそれぞれ真摯に対峙した3作は、観客が自らの家族に改めて思いを馳せる、貴重な契機にもなり得るだろう。

短編④ 震災から7年
12.6(木) 10:00-

『音なき潮騒』監督＝有元優喜 /2017年 /40分
『未来につなぐために　赤浜　震災から七年』
監督＝小西晴子 /2018年 /52分

東日本大震災から7年。忘却に抗わなければという思いに、映画作家たちもまた突き動かされている。原発20km圏内に位置する神社の宮司にスポットライトをあて、その家族や土地の歴史を見つめた『音なき潮騒』。波の動きをはじめ、静かな映像美に冒頭から引き込まれ、土地における生を追体験するような感覚を味わう。『未来につなぐために 赤浜 震災から七年』は、単なる復興のドキュメントに留まらず、原発事故の実態、目先のみを考えた国の施策への批判、住民たちの地域を愛する心に根付いての自治など、複合的に震災の姿を捉えた力作である。

短編⑤ 辺境に生きる子どもたち
12.7(金) 19:00-

『折りの果てに』
監督＝久保田徹 /2018年 /28分 / バングラデシュ、日本
『山河の子』
監督＝胡旭彤 /2017年 /57分 / 日本、中国

世界にはまだまだ過酷な環境に置かれた子どもたちが存在する。ミャンマー政府から迫害されたイスラム教徒であるロヒンギャ難民の子どものため、学校を設立しようと奮闘する在日ロヒンギャのアウンティン氏を描いた『折りの果てに』。両親が出稼ぎで祖父母と暮らす「留守児童」のマオ・シャンチや障害を持つ両親を支えるマオ・ジョンファなど、中国の山村の子どもたちを取材した『山河の子』。どちらも険しい表情をたたえる子どもたちがふと見せる笑顔が胸を打つ。世界の矛盾を丁寧に映し出した必見の正統派ドキュメンタリー。

短編⑥ レディたちのブルース
12.8(土) 10:00-

『また次階！』
監督＝森山周 /2017年 /10分 / ポルトガル・日本
『コール・ミー・ミセス・チャン』
監督＝陳巧真、徐智彦 /2017年 /16分 / 香港
『非正規に尊厳を！～メトロレディーブルース総集編』
監督＝松原明・佐々木有美 /2018年 /55分

生きることには笑いが必要。そして笑いを生み出すのは、多くの場合女性たちだ。ポルトガルにおいて、老女と男性の階段の上り下りにおける、何気ない会話から人生の豊饒さを切り取った『また次階！』。ごみ清掃を行う女性の日常から、香港が抱える問題に迫った『コール・ミー・ミセス・チャン』。『非正規に尊厳を！メトロレディーブルース総集編』は地下鉄の売店で働く非正規雇用の女性たちの闘争の記録でありながら、ユーモアたっぷりな女性たちの存在もあり、単なる告発の作品には終わらない。いずれの作品にも、女たちのしたたかさと魅力を感じさせられる。

短編⑦ 少女たちの戦い ―台湾・香港編―
12.9(日) 19:00-

『西索米～人の最期に付き添う女たち～』
監督＝黄威勝、賀照倫 /2017年 /30分 / 台湾
『巨大中国と戦う“民主の女神”～香港オタク少女の青春日記～』
監督＝中村航 /2017年 /59分

権力、社会に立ち向かう中華圏の若い女性たちの姿を捉えた2作。香港と台湾で事情は違えど、逆境にも挫けず自分たちの仕事や信念に誇りを持ち、戦う女性たちの美しさは普遍的だ。『西索米～人の最期に付き添う女たち～』は、台湾の葬式女子楽団の活動に密着。偏見の目に晒されながらも、互いに寄り添い懸命に働く姿が印象的。『巨大中国と戦う“民主の女神”～香港オタク少女の青春日記～』は雨傘運動のシンボル、アグネス・チョウのプライベートな側面を丁寧に描いた、本年度の映画祭で唯一のテレビ作品。

短編⑧ 珍日本カルチャー紀行
12.11(火) 19:00-

『タヌキの里のヒミツ』
監督＝川口宗一郎・山田大貴 /2017年 /17分
『がらんどう』監督＝鷲内里奈 /2017年 /26分
『ビヨンド・ザ・ファット』
監督＝今成夢人 /2018年 /60分

「カルチャー」を軸に日本を読み解く3作。伝統工芸品の信楽焼の背後に隠された、戦時中における日本軍の極秘任務の謎を解き明かす『タヌキの里のヒミツ』。火葬場や棺の製造など、人の死に日々向き合う「エンディング産業」の現場と、そこで働く人々を端正に捉えた『がらんどう』。監督本人の熱烈な愛と、冷静な批評性をもって「デブ専」カルチャーの実態に迫った『ビヨンド・ザ・ファット』。題材はまったくと言っていいほど異なるものの、それぞれ人の目になかなか触れないカルチャーを通じて現代の日本の姿を映し出す。

短編⑨ 最前衛ドキュメンタリー表現の
12.12(水) 19:00-

『10424』監督＝今治建城 /2017年 /10分
『緑の意思』監督＝酒田公望 /2018年 /13分
『凶暴なまでの沈黙』監督＝ヴァンサン・ギルベール / 2016年 / 20分
『KATSUO-BUSHI』監督＝中島悠 /2015年 /25分

実験的手法でドキュメンタリーにアプローチした野心的短編集。犬の殺処分に、直接的な描写を用いずに迫った『10424』。綿織物の仕事、人々の営み、美しい土地の風景を、宙を舞う綿の視点から見た白昼夢のように映し出す『綿の意思 ゴースト・オブ・コットン』。福島第一原発の原子炉建屋内の監視カメラが捉えた狐をモチーフに、喧騒と静寂の間を描いた『凶暴なまでの沈黙』。鰹節の製造工程を丁寧に捉えた『KATSUO-BUSHI』は、一見正攻法のドキュメンタリーだが、徹底的に凝視される手作業の光景は不可思議な魅惑に満ちている。

招待① 審査員長・原一男 次は「水俣」にチャレンジ！
12.1(土) 10:00-

『MINAMATA NOW！』（特別編集版）
監督＝原一男 /2016年 /45分

国と熊本県の責任を認めた関西訴訟最高裁判決の2004年10月15日にクランクインして以来、10年以上を経た今も撮影中のドキュメンタリー。棄却された死亡患者の遺族が認定を求めた溝口裁判、高齢化が進む胎児性水俣病患者らの日常。さらに自らダイビングのライセンスを取得し、メチル水銀が鉄板と石で封じ込められた水俣湾の海中を撮影。土本典昭監督の水俣シリーズが「昭和の水俣」を写し得たとしたら、本作は「平成の、終らない水俣」に挑む。水俣病事件をめぐる人びとの複雑な人間関係に悩まされながらも取材を続ける。

招待② 映画になった男
12.10(月) 19:00-

監督＝金子遊 /2018年 /98分

映画作家の原將人は、高校生のときに監督デビューして「天才映画少年」の名声をほしいままにした。それから50年。劇映画『あなたにみてほしい』で多額の借金を背負った原は、起死回生の劇場公開を目指して35年ぶりの『初国知所之天皇』ライブ上映、CDアルバム制作などを試みる。だが、63歳で双子の父親になってしまい…。監督が8年の月日をかけ、幻の作品や生演奏付き上映など貴重なフッテージを交えて綴る、原將人のドキュメンタリー。映画にすべてを捧げた元・天才映画少年の、再帰をかけた闘いがはじまる！

招待③ 追悼！田村正毅（たむらまさき）
12.11(火) 10:00-

『三里塚　岩山に鉄塔が出来た』
監督＝小川紳介・撮影＝田村正毅 /1972年 /85分

田村正毅さんが今年5月に永眠した。享年79歳。劇映画のカメラマンとして著名だが、スタートはドキュメンタリーだった。「三里塚」シリーズや『ニッポン国　古屋敷村』など、小川紳介監督と組んだ8本のドキュメンタリーは海外でも評価が高い。今回はその中の1本を上映し、田村正毅を追悼したい。本作は1972年冬、成田空港建設阻止の闘いで飛行を阻止するため、滑走路近くに鉄塔をつくる経緯を描く。全国から結集したトビたちの人力による60メートル余の鉄塔。田村たちクルーはよじ登り、決死の撮影を敢行、大スペクタル映画となった。